

平成 30 年 6 月 6 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370531

研究課題名(和文)濁音始まりの付属形式に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Historical linguistic study of the bound forms containing initial voiced obstruents in the Japanese Language

研究代表者

高山 知明 (Tomoaki, Takayama)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：20253247

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：日本語の付属形式(助詞、助動詞、接尾辞など)には濁音で始まるものが少なからず見られる。これは、一般の大和言葉の自立語では清音で始まるのを原則とするのと対照的である。他方、複合語を作るときに連濁と呼ばれる現象が生じる。本研究は、連濁との関連性を考慮しながら、濁音で始まる付属形式に関して、それらの適切な分類法を提示し、それらがどのように生じたのか、日本語の清濁対立とどのように関係するのかといった点について調査、考察した。

本課題は、日本語の歴史に関わる基本的な問題を明らかにするための研究の一つとして位置付けられる。

研究成果の概要(英文)：This linguistic study deals with the Japanese bound forms containing an initial voiced obstruent such as the postpositions bakari, de, ga; the suffixes buri (in 'shigoto-buri,' etc.), gachi (in 'kumori-gachi,' etc.); and other lexical elements. We discuss the following issues on the bound forms with referring to the relationship with rendaku compounding(i.e. sequential voicing).

(1) Classification of the initial voiced forms in the Japanese lexicon, (2) hierarchic role or position of each initial voiced form in a sentence, (3) characteristics of the phonotactic rule of voiced obstruents, (4) historical process of the birth of each initial voiced form, (5) noticeable trend of the increase of the initial voiced forms through the history of Japanese, (6) morphological comparison between initial voiced formation and vowel harmony, (7) controversial issue on the genesis of the contrast between voiceless and voiced obstruents, (8) other residual problems.

研究分野：日本語学

キーワード：清濁 音配列 phonotactics 助詞 助動詞 接尾辞 連濁 濁音

1. 研究開始当初の背景

和語(大和言葉)には次例のように語頭に濁音が来ないという音配列則のあることが知られている(ゴミ,ズレル等の違反語は否定的な評価を伴うなど意味に片寄りが見られることが多い)。

【例】カモ(鴨),シマ(島),ツキ(月),...
これに関連して(I)(II)のような現象がある。

(I)助詞・助動詞,接尾辞の類(これらを付属形式と言う)では,濁音で始まるものが普通に存在する。

【例】〔助詞・助動詞〕ガ,ダケ,ダ,デ,バカリ,〔接尾辞〕～ガチ(例:病気がち,渋りがち),～プリ(例:枝ぶり,仕事ぶり),...

(II)複合語の連濁,すなわち,後部要素となる和語の先頭がさかんに濁音化する。

【例】アマ・グリ(甘栗, クリ),シヨッキ・ダナ(食器棚, タナ),

これら(I)付属形式,(II)複合語の後部要素のいずれも,常に他の語彙要素に後続する。また,いずれもゴミ,ズレルのような意味の片寄りが起こらない。このように真性の語頭でなければ濁音の出現が許される。それゆえ,これらは上記の和語の音配列則の反映であるといえる。

(I)も,(II)複合語(連濁)と並んで,濁音の音配列にとって重要な問題である。とくに,濁音の音配列が日本語の歴史においてどのように形成されてきたのかを考える上で無視できない語彙要素である。

これまで,(I)はともすれば連濁の中を含めて考えられてきた。両者が近い関係にあるのは間違いないが,歴史的に見ても形成過程が同じとはいえない。従来,(II)複合語の連濁については様々な観点から取り上げられ,数多くの先行研究によって多くのことが明らかにされている。これに対し,(I)は取り上げられることが少なく,包括的に研究されていない。

日本語の歴史(とくに音韻面と形態法の面に関する歴史)の重要課題の一つとして,(I)を主対象とした調査・考察が必要である。

2. 研究の目的

付属形式における濁音始まりは,日本語の形態法に顕著な特質である。このことは,日本語の音韻構造とも密接に関連すると考えられ,音韻と語彙・語彙特性が相互に関わる問題として見ていく必要がある。

また,濁音のこのような現れ方は,日本語の構造が歴史的にどのように出来上がってきたのかを解明する上でも,その具体的問題の一つとして興味深い。濁音始まりの付属形式と一口に言っても,その発生の仕方は一様ではなく,多様な形成過程があるのではないかと予想される。そのため,連濁とは異なる取扱が必要となる。

様々な問題を前にして,まず取り組まなければならないのは,濁音始まりの付属形式の全体像を把握することである。この分野の現

状を踏まえると,具体的には,以下の課題を目的とする研究を行う必要がある。

(1) 該当する形式がどのくらい存在するのか,全体像を明らかにする。

(2) 古代語から現代語に至る中で,史的にどのように推移しているのかを明らかにする。

(3) 濁音始まりの形式の発生の仕方を可能な範囲で明らかにする。その多様性にどのくらいの幅があるのかを把握する。

(4) 付属形式における濁音の現れ方を分析し,形態音韻論,語彙的特性の面から,連濁との共通性,相違点を明らかにする。

3. 研究の方法

(1)前節の目的達成のためには,該当する付属形式の基礎資料が必要である。すなわち,濁音始まりの付属形式の収集を行い,該当する語・接尾辞とその属性情報の一覧データを作成する。作業は,『日本国語大辞典』(オンライン版の初出例を確認する『時代別国語辞典(上代編)』『時代別国語大辞典(室町時代編)』『角川古語大辞典』の大型辞典をもとに,その中から該当する対象を採集する。典拠資料の用例の確からしさには違いがあるので,そうした点を注記する等,情報の質的差異にも配慮する。

とくに接尾辞の類は辞典に立項されていないことが多く,形態素分析を施した上でデータ化する必要がある。形態素境界が一義的に決定できない場合,歴史的に異分析発生の可能性が考えられる場合もあるため,不確定情報も考慮しつつ候補になり得るものを記録する。

(2) 該当する各付属形式に関して,その形成過程に関する従来諸説を参照する。各説の問題点を検討し,それぞれの確からしさを考量する。

(3)(2)をも踏まえつつ,各形式の形成過程についての考察を行う。どのような要因が背景にあると推定されるかに注目する。想定されるものとして例えば以下の事項がある。

文法化が関わっているか。

意味の分化が関わっているか。

異分析(境界の取り違い)に起因する変化の可能性はないか

先行要素との融合が関わっているか

(4) 該当する付属形式の属性についてはとくに次の2点に注目する。

先行要素にどのような要素(語)が来るか(取り得る先行要素の種類・範囲はどのようなものか)。

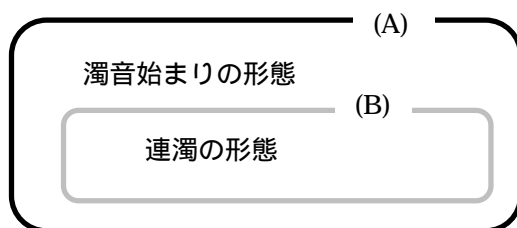
文中のどの階層に現れるか(具体的には,(i)接辞,(ii)複合語,(iii)句[たとえば名詞句内の名詞と助詞の結合,助詞どうしの結合など],(iv)用言複合体[いわゆる助動詞,接続助詞,終助詞など],(v)その他,といった違い)。

(5) 先行研究 期間内に行われている他の研究を踏まえ研究動向を確認しつつ, 全体的な

傾向性，歴史的な推移，濁音始まりの発生の仕方の多様性，連濁との相違点・共通点等の観点に沿って，データの分析・考察を行う。

4. 研究成果

(1) 前述の第1節「研究開始当初の背景」の段階では(I)(II)に類別して現象を整理していたが，各語を無理なく取り扱う必要上，全体を(A)「濁音で始まる形態」とし，そのうち，特別な条件の加わったものを(B)「連濁の形態」とする捉え方とした。これによれば，(A)の中でも特に清音で始まる形態との間に交替を持つ場合が(B)となる(自立語との交替が典型的である)。さらに，(A)の内部で，(B)に入るか否かは必ずしも画然とはしておらず，グレーゾーンを認めるものとする。



「男気(おとこぎ)」のような語を例にとると，これは2つの単純語から成る複合語というよりは，接尾辞「気(ギ)」の付加された語と見たほうがよい。その一方，「気(キ)」との関連性も否定することはできない。複合語か接尾辞かの違いは，必ずしも連濁か否かの違いと一致するものではない。しかし，概して，二つの区分が平行性を見せるのも事実である。そうしたことも踏まえる必要がある。

上図の捉え方は，日本語の語句における結合時の濁音の現れ方全体を包摂する。連濁だけに限定せず(つまり何が連濁かという定義に左右されることなく)濁音始まりの形式を俯瞰し，濁音の配列法が語句の形成にどのように関与しているかの全体を見渡すためには，このような捉え方を採るのが適切である。

(2) 濁音始まりの付属形式を，それが現れる文の階層別に分類すると，語の内部構造における形態，文節(あるいは句)の構造における形態，に分けられる。具体的に言うと接尾辞の類は，助詞・助動詞の類は に属する。前述(B)の連濁もこの分類に当てはめると，接尾辞同様，語の内部構造の現象なので，に入ることになる。また，には，動詞や形容詞とそれに付随する助動詞，接続助詞などから構成される「用言複合体」(河野 1996 など)が含まれる。実際，その先頭以外であれば濁音が現れうるという分布を持つ。

さらに，は の下位の階層なので， の中に包摂することができる。このように整理すると，連濁も含めて，濁音で始まるか否かは，語にとどまる問題ではなく，文における諸要素間の結合に関わることが明らかになる。

言い換えれば，配列則が適用される文内の領域(domain)は，文節(あるいは句)に相当する単位である。

濁音の音配列は，しばしば非語頭規則などと語を単位とする問題として言及されるが，実際には個々の語を越えた，文内の要素間の結合上の問題である。従来は，用語上も認識上もこの点が必ずしも明確に位置付けられていなかった。この音配列則は，日本語の文法的単位がどのような構造を持ち，それらがどのように組み立てられているかという点と深く関わることをあらためて認識する必要がある。日本語の構造の特質，およびその構造に関する歴史に関わる問題を理解する上でこの点は重要である。

(3) 濁音始まりの付属形式の様々な事例を見てみると，それぞれの発生には固有の動機があり，その形成過程も一様ではないことがわかる。その一方，形成過程の違いはあっても，付属形式においては濁音で始まるものがあらたに現れてくるという傾向が見取れる。発生は多元的ではあるが，一定の方向性によって特徴づけることができる。

さらに注目すべき点は，その事例はすでに文献時代(7,8世紀)以前にさかのぼるものがある一方，近代語に至る歴史を通じても見出されることである。歴史的持続性という点でも特筆すべき性格を有している。

音配列について言えば，最初からそれが確固として存在したわけではなく，それに沿う語が増えていくことによって結果としてできあがってきたものなのかもしれない。ただし，かりにそうだとすると，文献時代はその段階をすでに過ぎており，音配列の完成期以降の状態にある。

個別の事例はたがいに違っていても，全体として見れば，長い時間をかけて一種の群化が進行したと見ることもできるかもしれない。

しかし，このように，たいへん長い時間にわたる現象を包括しうる既存の言語学上の一般的概念・用語が見当たらない。個別の言語の歴史を見ていく中で，同様の事例が他の言語にも見出せるのではないかと予測される。日本語の濁音に関する本研究を踏まえて，さらに検証を行うことが今後の課題となる。

(4) 歴史的に見て，濁音始まりの付属形式が発達する背景として考えられるのは，日本語が開音節構造であり，語末が常に母音で終わることである。一定して母音が来るので，先行音の種類に応じた音韻交替が起こりにくい。

自立語とそれに続く付属形式を統合する形態法としては，類型論的に見ると，母音調和が思い浮かぶ。すなわち，単位の結合において，出現母音を一定の特徴を持つ群から限定的に選択することにより，結合を明示するやり方である。しかし，日本語にはそのような組織的な構造は見られない。

古代語における「音節結合の法則」(有坂 1934)がかりに母音調和の名残だとしても，その領域は「同一結合単位」すなわち形態素(語

よりも小さい)であり、複数の単位を貫くことはほとんどなく、単位の長い連続をまとめ上げるような統合力も生産性もない(その意味でも典型的な母音調和とは言い難い)。

上記の二点に関して、構文上は日本語とよく似た朝鮮語(韓国語)と対照させると、第一に、語末には閉音節(子音終りの音節)も来るので、それに続く付属形式は、先行音に応じて形態を変えることが多い(母音挿入とそれともなうリエゾンなど)。また、二つ目の母音調和についても、すでに母音調和の崩壊が始まりつつあったとされる中期朝鮮語においても、日本語の助詞に相当する接辞や、動詞の連結語尾が先行語や先行語幹に応じて、母音の形を替える。古代日本語のすがたはこれと比べても極めて対照的である(李基文 1972a, 1972b など参照)。

この問題はさらに、同じく開音節構造の他の言語に、どのような音配列があるのか、また、そうした言語で、単位の結合時にどのような形態法があらわれるのか、といった点につながる。すなわち、類型論的観点に基づく研究への発展が期待される。複数の言語を対象とした考察によって他言語との相違点・共通点を明らかにしていけば、日本語の特徴の輪郭をより明瞭に捉えることができる。本研究の成果はそのための足掛かりにもなる。(5)連濁については、日本語の清濁対立の形成との関わりが先行研究によって提唱されている(肥爪 2003)。複合語形成を契機に、初期の濁音が発生、清濁の分化が生じ、清濁対立が出来上がっていったとするシナリオである。一言で言えば、連濁の発生によって濁音が生まれたとする考え方である。

他方、濁音は、古代語の単純語にも現れる。その濁音は2音節語の2音節目に現れるものにほぼ限られる。これらも、上記の説に従えば、(少なくともその大半は)1音節語どうしの複合(即ち連濁)によって形成されたということになる。ところで、先行研究によれば古代語にはザ行音の連濁例が他の音(ガ行、ダ行、バ行)に比べて顕著に少ないことが明らかにされている。しかし、2音節語の2音節目の濁音を見ると、ザ行音だけが少ないということがなく、同様の片寄りが見られない。この点に照らし合わせると、これらの濁音が果たして連濁に由来すると言えるのかどうか、慎重に考える必要が出てくる。

語頭に立たないという音配列則がそもそものように出来上がったのかという問いに対しては、連濁起源説は説得力があるのだが、他方で、単純に説明の付かない点があるのも事実である。ザ行音の連濁が僅少な理由は、その音声が破裂音のガ・ダ・バ行と違い、摩擦音(あるいは摩擦音)であることと何らかの関係が疑われている。もしそうだとすれば、その点でも連濁とは違った過程を考えなければならなくなる。

濁音始まりの形式に関しても、否定辞ズが存在するように(形成過程としてはナ系と何

らかの後続要素との融合説がある)、ザ行が最初に来る形が存在する。実際、各付属形式の形成過程について見ると、連濁とは異なり、質的に多様であると考えられる。

濁音の音配列というのは、最初に法則が確立して、それに則って語形成が行われるというものではなく、濁音を持つ語が数を増やしていくことによって、結果として音配列が出来上がるという、一種の群化の過程を経て見られる。上代以前に関しては、その面を重視した見方が実態により即しているのかもしれない。

古代語の濁音に関しては、未解決の問題が存在する。語頭に現れない濁音の配列則に対しては、実際には複雑で、多元的な形成過程を考えるほうがより適切なのかもしれない。

あるいは、方法的な面から反省を加えると、内的再構のある種の限界を示す事例の一つと言えるのかもしれない。

これらは、今後、さらに考えていくべき課題である。

(6)本課題では、濁音が語頭に立つという点で音配列の例外となる擬音語・擬態語についても取り上げた。論文、発表の中にはこれに関する成果も含まれている(5〔雑誌論文〕、〔学会発表〕)。また、および濁音の音価に関する考察を行なった(5〔雑誌論文〕)。今後、研究をさらに発展させるための足掛かりとして位置付けられる。

引用文献

- 有坂秀世(1934)「古代日本語における音節結合の法則」『国語と国文学』(昭和9年1月)、『国語音韻史の研究 増補新版』(三省堂、1957、東京)所収。
河野六郎(1996)『言語学大辞典』第6巻術語編、「アルタイ型」「言語類型論」「膠着」「範例」「用言複合体」の各項目。
肥爪周二(2003)「清濁分化と促音・撥音」『国語学』213, pp.95-108。
李基文(1972a)『国語史概説 改訂版』塔出版社、ソウル(李基文 1975)。
李基文(1972b[再版 1977])『国語音韻史研究』塔出版社、ソウル。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

高山知明、三重県志摩和具方言における前鼻子音、音韻研究の新展開 窪園晴夫教授還暦記念論文集(田中真一他編、開拓社、単行の論文集)、2017, pp.70-82。

高山知明、八行子音の脱唇音化 個別言語の特色と音韻史、日本語史叙述の方法(大木一夫・多門靖容編、ひつじ書房、単行の論文集)、2016, pp.95-121。

高山知明, 音韻の史的研究における二つの立場, 現代音韻論の動向 日本音韻論学会 20周年記念論文集, 2016, pp.184-187.

高山知明, 連濁と濁音始まりの付属形式 個別言語研究の意義, 日本語研究とその可能性 (益岡隆志編 開拓社 単行の論文集) 2015, pp.2-15.

〔学会発表〕(計3件)

高山知明, 八行子音の脱唇音化と中世日本語の擬音語・擬態語, 第12回音韻論フェスタ, 立命館大学・二条キャンパス(京都府京都市), 2017年3月9日.

高山知明, オノマトペアの構造と音変化: 日本語の脱唇音化に関する事例研究 (ポスター発表) 国立国語研究所国際シンポジウム「日本と世界諸言語のオノマトペ」国立国語研究所(東京都立川市), 2016年12月18日.

Tomoaki Takayama, The history of Rendaku, Rendaku Workshop (国立国語研究所「日本語レキシコン - 連濁事典の編纂」(代表 Timothy Vance) プロジェクト共同研究), ボルドー大学(フランス), 2015年7月2日.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高山 知明 (TAKAYAMA, Tomoaki)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号: 20253247